速記録

文化科学研究科
学術研究交流フォーラム　２０１１
シンポジウム
「日本の中の世界、世界の中の日本」

日　時　　平成２３年１２月１１日（日）

午前１０時　０分　開会

午後　０時４０分　閉会

場　所　　国際日本文化研究センター

１階　セミナー室１

〔午前１０時　０分　開始〕

○司会（三輪）

おはようございます。皆さん、朝早くから参加いただきまして、どうもありがとうございます。

これから「日本の中の世界、世界の中の日本」というテーマでシンポジウムを開催いたします。シンポジウムでは、比較文化専攻の中牧先生、日本歴史研究専攻の日高先生、国際日本研究専攻の井上先生、そして日本文学研究の野本先生がそれぞれご専門の立場から30分ずつのお話をしていただきます。その後に、大体30分ぐらいの時間を予定しておりますが、まとめて質疑応答の時間をとりたいと思っています。

皆さん、御存じだと思うのですけれども、きょう午後１時半からワークショップがありまして、そのワークショップの研究テーマをつくるというところと午前中のこのシンポジウムでの講演内容というのが微妙に関連しているようですので、特に午後のワークショップに参加される学生さんは、そのことも踏まえてぜひじっくり話を聞くとともに、その後の意見交換、ディスカッションにも参加していただきたいと思います。

私は、司会を務めさせていただきますメディア社会文化専攻の三輪と申します。よろしくお願いします。（拍手）

それでは、最初の報告者ということで、比較文化専攻の中牧先生にご登壇いただきたいと思います。

先生はご専門が宗教人類学、経営人類額ということで、日本宗教と日系宗教の人類学的研究、会社文化の人類学的研究、ブラジルの民衆文化、アマゾンの先住民化、カレンダーと文化比較というようなご研究、ご専門で、現在はカレンダー文化の比較、それと会社と宗教の文化人類学的研究ということをされていらっしゃいます。

きょうのご講演では、「日本の中のニッケイ、世界の中のニッケイ」というテーマでお話をいただきます。追加資料として、受付で配付しておりますが、もし入手されてない方がいらしたらば、手を挙げていただければお届けいたします。

では、中牧先生、準備がよろしければお願いいたします。

日本の中のニッケイ、世界の中のニッケイ

比較文化学専攻　中牧　弘允　教授

おはようございます。ただいまご紹介にあずかりました中牧です。きょうのテーマは、主題に則して「日本の中のニッケイ、世界の中のニッケイ」でして、日系を通して日本のなかの世界を見、世界のなかの日本を考えるという趣旨です。

最初は日本のなかの日系の話をさせていただきます。まず、1990年の入管法の改正によって、特にブラジルを中心とした南米からの還流と、南米と日本を行き来する環流という、同音異義の現象が起きてまいります。

最初は親族の訪問というような形で、1980年代の後半から始まりましたけれども、入管法の改正によって多くの方々が、いわゆる３Ｋと言われるような労働市場における労働力として、日本に来られるわけです。出稼ぎという言葉は、かつて日本からブラジル等に行ったときに使われたものですけれども、新しい意味を帯びてローマ字で使われるようになりました。そして、日系人が集住する地区ができてまいります。浜松市であるとか豊田市、群馬県の大泉町とか太田市などに多くの南米系の人たちが居住をするようになりました。

こういう現象を移民史の研究者、社会学者、人類学者、いろんな方たちが取り上げました。それを１つの社会問題として考える立場もありますし、何らかの解決策を見い出そうとする実践につなげたり、あるいはもっと学問的な形でそれを考えようというようないろんな立場があります。たとえば、顔の見えない定住化ということを梶田先生、丹野先生、樋口先生などがおっしゃいまして、それが１つの通説になっているわけです。

一方、社会問題としてとらえる行政の立場からは、外国人集住都市会議というようなものができまして、それは問題を解決をするという、国策としてはなかなか手の行き届かないところを自治体の現場で処理するといった形のものになったわけです。また一方ではもっと積極的に都市の文化政策として考えようという見方も出てまいりました。

私が特にかかわったのは、総合研究開発機構（ＮＩＲＡ）での政策研究のなかでして、価値創造的な、ポジティブな意味での在日外国人を、日系人も含めて考えようとしました。新しいまちづくり、都市づくりの一翼を担う存在として積極的にとらえていこうとしたのです。例えばニューヨークは中流階級と低所得者あるいは失業者という２つの階層に分れるので、これを二都物語なんて言うのですけれども、そういうふうなありようは決して望ましいものではない。むしろ外国人を包摂する、ソーシャル・インクルージョンという概

念がありますけれども、そういうふうな形で都市の活力のひとつの源として取り込んでいこうとする考え方もあります。ともすれば、文化的にも、あるいは教育とかの条件においても疎外されやすい在日外国人にとって、それを問題視するというよりは、むしろ新しい積極的な意味と役割をみいだしていこうとする立場です。

私などが考えていたのは、宗教学の出身だからかもしれませんが、トランスという、「飛ぶ」とか「越える」という発想でありました。観光都市から美観都市へのトランスとか、ガバメントからガバナンスへのトランスとかですね。変性意識というまさにシャーマニズムのような研究から出てきた発想で、文化的なアントレプレナーあるいは政策企業家のような形で、むしろ新しい事業や新しい文化をつくり出していく、そういう役割をになっているのではないかと考え、それを政策課題の形でまとめてみたことがあります。

トランスボーダーの都市住民、特に在日の外国人というのは、オールドカマーあるいはニューカマーと言われてますけれども、これを民俗学、フォークロアのほうの観点からいくと、「まれびと」ととらえることができるのではないか。異界からの異形の存在をフォークロアでは「まれびと」とか「ほかいびと」と言います。また宗教者、流浪する人々がいます。からららがもっている性格は、一方では祝福を与え、他方では災厄をもたらす、一方では歓待するけれども、長くいてもらっては困るので忌避する、あるいは定住と周縁というような二項対立でこれまでとらえられることが多かったわけですけれども、そういう両義的な性格を持った存在として外国人の移住者もとらえられるのではないかと思います。出稼ぎの日系人もそれに入るかもしれません。

しかし、かれらは単なる一時的な労働力ではなく、むしろ権利をもった主体、文化を持った権利主体でもある。「まれびと」から「むらびと」へという方向性もあるのではないか、それを探ろうとしました。よく言われている多文化共生とは別に、多文化認知というような言葉に象徴される積極策も必要ではないかと指摘したことがございます。

都市ホテル論というのは、梅棹忠夫先生の１つの理論でありましたけれども、都市は定住する人のものというよりは、むしろ都市を利用する利用民にとっての意味を今後は考える必要があると指摘していますが、そういう意味では「まれびと」というのは行き来する、還流する人々でもありますので、それを重視する政策というのもありではないかと考えました。

これが「日本の中のニッケイ」のイントロになるわけですけれども、他方「世界の中のニッケイ」をおさらいしてみます。日本人の海外移住は明治元年の元年者、つまりハワイ

のサトウキビの耕地に送られた元年者から始まったというのが通説ですけれども、これは政府が認可したものではなくて、維新期のどさくさに紛れて外国人が日本人を連れていったものでしたので、これをもって海外移住の最初とするのはおかしいという議論があります。むしろパスポートを発行したところから広く移住を考えていくのが歴史的にはふさわしいと判断し、私などが関係をいたしましたＪＩＣＡ横浜の海外移住資料館では、このような立場をとっております。御免の印章というのはパスポートのことですけれども、最初は芸人たちに与えられていましたが、そういうものを出発点として「世界の中のニッケイ」の歴史が始まるという展示をしております。

その後、政府が後押しをした移住としては、国策としてのハワイ移住、すなわち官約移民が1885年から始まり、1908年で終わります。その後、日本人がアメリカにふえ、黄禍論や排斥運動が起こります。それに対応して呼び寄せだけに自粛していきます。

アメリカから締め出された移住の波は南米に向かい、1908年にブラジル移住が開始されます。ブラジルはじめとする南米各地に日本人は移住していきました。

この間、第２次世界大戦中、特にアメリカを中心に、またペルーからもそうでしたけれども、強制収容の憂き目に遭う時代がありました。

戦後移住が再開するのは1952年で、主に南米に向かっていきました。

その後、戦時中の強制収容の補償がアメリカとカナダでおこなわれました。そして、ロサンゼルスに全米日系人博物館ができ、このような強制収容を繰り返さないということを多くの人とともに共有する展示がなされています。

その後、冒頭で申しました南米からの日系の還流（環流）の現象が起きました。

このことを展示を通して見るとどうなるか。民博に勤め、実際の展示に携わった者として、それを紹介したいと思います。全米日系人博物館の展示は、強制収容という暴挙を繰り返さないことが主題であり、戦時中のハートマウンテン収容所のバラックの建物が象徴的な展示になっています。9.11後のアメリカ政府による特にアラブ系の人たちに対する扱いに対しては、全米日系人博物館を拠点に、かつての強制収容の反省を踏まえた運動が起っています。展示がそういう役割つながっているのです。

ハワイにおきましては、ハワイ日本文化センターの歴史展示のなかに「おかげさまで」という感謝の気持ちを込めた展示があります。１世から習ったこととして、犠牲、義理、名誉、恥・誇り、責任、忠義、感謝、仕方ない、頑張り、我慢、恩、孝行と刻まれた石柱が12本たっています。

ペルーの日本人移住資料館では、先住民と日本人は同じモンゴロイドで、日本からの移民を通してこのモンゴロイドが再会した、というテーマを掲げています。これは東大名誉教授の増田義郎先生のアイディアに基づくものです。

他方、ブラジルの日本移民史料館のほうは、梅棹忠夫先生がブラジル移民70周年の記念のシンポジウムのときに打ち出した「われら日本人、新世界に参加す」という主題に基づいた展示がなされています。そこでは最初の移民船である笠戸丸の模型とか木像の開拓小屋、さらには産業開発、特に農業の分野における日系人の貢献をあらわす展示になっています。

私が梅棹先生監修のもとで直接携わったJICA横浜の海外移住資料館のお話を少しさせていただきます。あわせて、旧神戸移住センターの展示にも触れたいと思いますが、パンフレットを回しますのでご覧ください。

これは象徴展示なのですけれども、まさに日本人が世界に参加したということをフロート（山車）によって表象しています。アメリカのポートランドのローズ・フェスティバルのときに出したベジタブルフロートです。こちらの見える側はアメリカの星条旗をハクサイやらジャガイモやらで構成し、煙突はサツマイモで表現しています。向こう側には日章旗があるのですが、写真には写っていないのでどうなっていたのかわからない。1920年代のお祭りで、ポートランド周辺の農場で日本人の移住者がつくった野菜を使って、アメリカにこのような形で貢献をしているというところを見せた。ブタとかもこのフロートには乗っていました。これがまさに新世界に参加した姿をあらわしているので、象徴展示として入口に置かれています。

こちらはブラジル・アマゾンのトメアスという移住地で栽培しているピメンタ（胡椒）のコーナーです。まさに、農業の分野で日系人は多大なる貢献をしたわけですから、「新世界に参加す」ということを意図した展示になっています。

こちらはハワイで撮影された６世代家族の写真す。ハワイは早くに移住が始まりましたので、今では６世の子供が生まれています。また、日系ではあっても、さまざまな混血がおこなわれています。そして、こういうまとまりをもった形で記念写真におさまるお祝いをしているわけでます。いかのも写真を撮っているような風景ですけれども、カメラとは関係がございません。

実は、ここに「世界の中のニッケイ、日本の中のニッケイ」というコーナーがあります。あまり充実した展示ではありませんが、本日の主題に非常に近いので紹介させていただき

ます。太鼓とか法被を通して、世界に日本の文化が伝わっている。最初は１世の文化だったものが、その枠を越えて２世、３世、そして非日系の人たちにもひろがっていることを象徴しているわけですが、この太鼓は日本からの輸入品ではなく、地元のカリフォルニアワインの樽でつくったものです。

こちらは、神戸の旧移住センターの展示です。2009年にオープンしました。ここでは移住センターの持っている記憶を中心に私は展示を心がけました。これは笠戸丸のブラジル、サントス港への到着風景の写真なのですが、そこに短歌を入れております。「この水は日本に続くと　サントスの　海見て一人　つぶやきし母」と、こういう文言とともにこの展示を構成しています。

この対面のほうの展示には、資料も並べておりますけれども、大きな写真のパネルのところには、やはり同じように歌を入れております。トーアホテルで移住のための積み出し準備をしているところの風景なのですけれども、手拭い１本でも持ってきたものは捨てがたいという移民の思いをつづったものです。

実は、この神戸の移住ミュージアムの展示には多文化共生展示というのがあり、多分常設ではこれが今のところ日本の唯一の多文化共生展示ではないかと思います。「世界から神戸－多文化共生に向けて」ということで、京都大学の竹沢泰子先生が担当した展示です。特に、阪神・淡路大震災の後、外国人に対する支援活動をとりあげています。震災時に活躍したＦＭわいわいの放送機器を中央に並べて、これからの移住あるいは在日の移住者について考えることができる展示になっております。

梅棹先生が「われら、新世界に参加す」というテーゼを打ち出したときの意味、趣旨ですけれども、移住のサクセスストーリーでも「棄民」という被害者意識でもなく、海外移住の文明史的意義は新世界の文明づくりに参加したことにある、と。これが多くの日系の人々に励ましとなったのです。

他方、オーストラリアを視察した梅棹先生は、企業移民とか企業移住を構想しておりました。本社ごとの移転ですね。新世界というものは人類共通のフロンティアであって旧世界ではない。そこからＡＢＣ３国の環太平洋連携というのを夢想していました。太平洋同経度国家連合とも言いましたが、Ａはオーストラリア、Ｂはブラジル、Ｃはカナダです。ブラジルは太平洋国家ではないという反論に対しては、アンデス山脈をトンネルでぶち抜け、と。そうすると、太平洋につながるという奇抜な発想でした。これが日本の１つの未来像であり、日本は旧世界には手を出さないほうがいい、むしろ中級国家として太平洋の

国々と手を結んだほうが日本人のために幸せだと、主張しました。われわれは、そういうことも心にとめながら、これからの未来を考える必要があるのではないかと思います。

以上のように政策論として移住を考えることもできます。特に日系ということは、最近の丹野清人先生の論文によりますと、日系はなぜ特別扱いをされるのかということのルーツが実は壬申戸籍にさかのぼると指摘しています。戸籍と国籍の問題にさかのぼって、その当時の日本の国民というものが１つの境になっているという興味深い指摘もありまして、そんな観点からも見ることもできます。また、経済とか労働の問題、社会学では社会変動とか人口移動の問題、人類学ではこれまでは特にエスニシティーとかアイデンティティーなどのことを考えてきました。また、文明論として移住をとらえることもできます。あるいは、ミュージアムというような装置における移住の問題もあります。

最後にカレンダーもお回しいたしますけれども、「世界の中のニッケイ」というものを考えるとき、「日本の中のニッケイ」をあらわす象徴的なカレンダーを持参してまいりました。こうしたミュージアムの資料からも移民のことを考えることができますし、複眼的なアプローチをとることによって、移住の問題を深めることができます。総研大のこういう場を通して、こういう問題をいろんな観点から発展的にとらえることができるのではないかと指摘して、私の話題提供を終わらせていただきます。ありがとうございました。

（拍手）

○司会（三輪）

中牧先生、どうもありがとうございました。日系というのをいろいろな立場から見ると、いろいろなものが見えてくるというお話だったと思います。質問は後ほどまたお受けいたしますけれども、ぜひ書きとめておいてください。

日本のなかのニッケイ
世界のなかのニッケイ

中牧弘允
民博／総研大
111211@日文研

ニッケイの還流・環流

- ニッケイをとおして課題に迫る
- 1980年代後半からはじまる
  - 親族訪問ビザ
- 1990年からは政策として推進
  - 「定住者」のカテゴリーの新設。「日系人」の特別あつかい
  - 3Kの労働力市場における外国人雇用
  - 日系人離職者に対する帰国支援事業（2009年度）
- デカセギの南米日系人
  - 集住地区:大泉町、太田市、浜松市、豊田市など
  - 顔の見えない定住化（梶田孝道、丹野清人、樋口直人）
  - 外国人集住都市会議（2001～）
  - 都市文化政策

都市文化政策

- ＜価値＞創造的vs＜価格＞創造的
- アイデンティティをこえて
  - 都市の個性、その弊害　e.g.　NYの二都物語
  - 文化的に疎外されやすい在日外国人
- トランスの思想
  - 観光都市から美観都市へのトランス
  - ガバメントからガバナンスへのトランス
  - 文化企業家、政策企業家の変性意識
  - トランスボーダーの都市住民
  - トランスポリタンな都市連携

トランスボーダーの都市住民

- オールドカマーとニューカマー
- 「まれびと」としての外国人移住者
  - 異界からの異形の存在
  - ほかいびと
  - 祝福と災厄、歓待と忌避、定住と周縁
- 「まれびと」としてのデカセギ日系人
- 越境、環流する「まれびと」
  - 労働力から「文化をもった権利主体（むらびと）」へ
  - 多文化共生から多文化認知へ
  - 都市ホテル論（梅棹忠夫）の「まれびと」重視政策

世界のなかのニッケイ

- 日本人の海外移住
  - ハワイの元年者は政府認可ではない
  - 御免の印章
- 国策としてのハワイ、アメリカ移住　１８８５～1908
  - 排日、呼び寄せ、1924の排日移民法
- 国策としてのブラジル移住　1908～1993
- 第二次大戦中の強制収容
- 戦後移住の再開　1952～
- 強制収容の補償　1988　→　全米日系人博物館
- ニッケイの還流･還流

海外移住の展示

- 全米日系人博物館
  - 市民の強制収容を繰り返さない
  - ハートマウンテン収容所のバラック
- ハワイ日本文化センターの歴史展示
  - おかげさまで―ハワイの日本人物語
  - 犠牲、義理、名誉、恥･誇り、責任、忠義、感謝、仕方ない、頑張り、我慢、恩、孝行
- ペルー日本人移住史料館
  - モンゴロイドとしての共通性、移民をとおして再会（増田義郎）
- ブラジル日本移民史料館
  - われら日本人、新世界に参加す（梅棹忠夫）
  - 笠戸丸の模型、開拓小屋、産業開発への貢献

JICA横浜海外移住資料館

ローズ・フェスティバルの野菜山車

神戸「みなとの祭り」のモデル

コショウ栽培コーナー

6世代家族

世界の中のニッケイ

海外移住と文化の交流センター
移住ミュージアム

神戸移民収容所→神戸移住センター

多文化共生展示

FMわいわいの使用した放送機器

われら、新世界に参加す

- 移住のサクセス・ストーリーでも「棄民」という被害者意識でもなく、海外移住の文明史的意義は新世界の文明づくりに参加したことである。
- 1980年にオーストラリアを視察した梅棹は企業移民、企業移住を構想した。出店ではなく、本社ごとの移住である。
- 新世界とは：先住民はいるものの人類共通のフロンテイアである。中国やインド、あるいはロシアなどの旧世界ではない。
- 梅棹はABC3国との環太平洋連携を夢想した。太平洋同経度国家連合。Aはオーストラリア、Bはブラジル、Cはカナダである。これら3国は中級国家で超大国になれない。これで国家連合がまとまれば21世紀の日本はかなり安泰だと予測した。もっとも頼りになるのはオーストラリアで、インドネシア、フィリピン、ニュージーランドなどをくわえてもよい。
- 問題は大西洋国家のブラジルだが、アンデス山脈にトンネルをあければ太平洋とつながると大胆な提言をした。そして旧大陸、旧世界には手を出すなと付けくわえた。

移住のかかえる諸問題

- 政策論：移住政策、都市文化政策
- 移民史
- 経済事情
- 労働問題
- 社会変動・人口移動
- エスニシティ、アイデンティティ
- 文明論
- ミュージアムという情報装置
- 複眼的にアプローチしなくてはいけない喫緊の課題

○司会（三輪）

それでは、ご準備をお願いしたいのですけれども、２番バッター、日高先生。日高先生は、日本歴史研究専攻の教授でいらっしゃいます。ご専門は漆工芸史ということで、現在のご研究のテーマは蒔絵を中心とする漆工芸史、あと交易品としての漆器を巡る文化交流に関する研究をされていらっしゃいます。

今回は「交易品を美術史からみる」というテーマでお話をいただきます。では、日高先生、よろしくお願いいたします。

交易品を美術史から見る

日本歴史研究専攻　日高　薫　教授

ご紹介に預かりました日本歴史研究専攻の日高でございます。私は、タイトルにもありますように、美術史が専門ですが、ここ数年間は近世の日本と世界とのかかわりの中で、どのような美術品が生まれ、それらがどのように移動し、どのように受けとめられたかという問題に特に興味を持って研究を行ってまいりました。

具体的には、日本からヨーロッパ向けに輸出された漆器――漆の工芸品ですね――の実態やスタイルの変化、また数年前からはそれらが同じ交易美術品である磁器などともに、当時のヨーロッパにおける東洋趣味の盛り上がりの中で受容されたありさまなどに目を向けて、数名の仲間たちとともに調査を進めております。このように私が常日ごろ向き合っている交易品としての漆器を通じて、日本とその他の世界との交流や混交、アイデンティティーの問題を考えてみたいというのが本日の話の趣旨でございます。

美術史で言うところの様式、スタイルは、決して日本という国、または民族のみが独自に生み出したのではなくて、そこには日本とその外側にある世界との関係性が反映されているのではないかということについて、最近の成果を踏まえつつご紹介できたらと思います。

さて、御存じの方も多いと思いますが、漆器はある種の樹木からとられた樹液を精製してつくる塗料を使った美術工芸品です。漆の木が生育する東アジアの各地域では、それぞれ特色ある漆工技術が発達してまいりました。日本美術のほかの分野と同様に、日本で製作された漆器の技術や様式に、中国からの影響が色濃く反映されていることは幾度となく指摘されてきています。

奈良時代は大陸渡来の漆の製品や漆工技術が最も大きな影響を持ち得た時代でした。東大寺の正倉院に伝来する優れた螺鈿漆器の大半は、中国製であることが近年の調査によってほぼ明らかとなってきていますし、日本固有の装飾技法と見なされる蒔絵技法さえも、その起源は中国にある可能性が極めて高いと考えられます。

大陸の先進の漆工技術を模倣、学習して急速に発達した日本の漆工芸は、遣唐使が廃止された平安時代中後期に至りますと、国際色豊かな唐の文化の影響を離れて、みずからの国民性を加味した新たな創造の段階に至ったとするのが、従来の文化摂取の理解の中心的な枠組みでありました。そして、蒔絵という表現技法の完成は、この和様の成立と分かち

がたく結びつけられて語られてきたわけです。

しかし、平安時代半ば以降も日本における舶来品の憧れは衰えることはなく、周辺諸国との交流が途絶えたわけでもありません。特に12世紀以降、宋や元の積極的な対外活動のもと流通するようになった中国や朝鮮、東南アジアなどの美術工芸品は唐物と呼ばれ、富裕層の間でコレクションを形成し、彼らのステータスシンボルとなったことはよく知られています。

唐物の受容としましては、従来水墨画の積極的な摂取や吸収ばかりが注目されてきましたが、同じ唐物として渡来した漆器の受容に着目しますと、文化交流の多様な側面が見えてまいります。彫漆や薄貝螺鈿など中国の漆器の日本漆工への影響は一部では認められるものの、鑑賞の場における熱狂的な支持とは裏腹に、顕著な結果を生み出すに至っておりません。むしろ、唐物の鑑賞に唐とやまとの対比の妙を見い出し、和物漆器には唐物とは異なる方向性を求める傾向が強く認められます。異国の文物との出会いは、その模倣や吸収に向かう場合と、逆にアンチテーゼとしての創造を導く場合があるということを日本中世の唐物受容の実態は物語っています。

ここで、東アジア海域の貿易状況を確認しつつ、アジアの内部で各地域の漆器がどのように移動していたかについて簡単に整理してみます。

中国を初めとする各国の文献記録は、海外との通行に関する制度的な側面について詳しく記す一方で、貿易の具体的な事例については何らかの問題が起こらない限り記録していません。そういうわけで、アジアの海域全体の貿易実態を面的にとらえることは大変難しいのですけれども、まず前近代のアジア海域の状況を大まかにとらえますと、国家使節の往来によってのみ貿易が担われていた８世紀までと、海上の活動が活発化して定期的な船舶の往来や商品、人、文化の交流が盛んとなった９世紀から14世紀、さらに明の海禁政策による大きな変化が生じる15世紀以降とに大別されます。

日中間の交流は、初めは朝鮮半島経由で渤海湾を経る湾岸寄りの航路を往来していましたが、８世紀半ばに日本と新羅との関係が悪化することにより、博多から東シナ海を横断して寧波に至る南洋ルートが定着しました。寧波はよい港であることに加えて、中国国内の漆工業や商業の中枢であった長江下流の先進的な地域とのアクセスに優れた都市でしたので、ほかの港を押さえて大きく発展し、以後、宋、元と日本や高麗とを結ぶ窓口として機能するようになります。

この時期、日本は中国との公式の国交を取り結んでいませんでしたけれども、博多・寧波ルートをつなぐ盛んな中国系の海商の活躍によりまして、中国江南地方との間に圧倒的な頻度で往来が行われました。日本から宋に向けては、遅くとも10後期後半以降、ここに挙げたような金・銀の蒔絵や螺鈿の漆器が、扇や日本刀などともに海を渡り、元に入っても同様の状況が続いたと推測されます。スライドの写真のようなものが輸出されたと想像されるわけです。

宋の方勺による泊宅編には、「螺鈿はもとより倭国から出でたもので、さまざまな形があり、非常に巧みな細工である」という一節がありまして、この記録の著者が螺鈿技法の起源を日本にあると誤解していたとが知られます。こうした評価が生まれる背景には、壮大な中国において螺鈿工芸が一時的に衰退していたことがあったと考えられているのですけれども、少なくとも螺鈿漆器の技術や様式が大変優れた段階に達していて、本家の中国人をも納得させるような品質であったということがわかるわけです。

これに対して、宋や元の中国から日本へは水墨画、陶磁器に並ぶ唐物として中国漆芸を代表する彫漆の漆器が盛んに輸出され、絶大な人気を誇りました。

日本国内で伝世する中国製漆器としましては、このほか螺鈿や日本で沈金と呼ばれる鎗金の漆器が多数存在しますが、興味深いのは螺鈿は彫漆ほどの扱いを受けなかったという点です。唐物漆器の目録には、堆朱ですとか堆黒などのさまざまの漆漆器が列挙されているのですけれども、この中に螺鈿の漆器が含められることはまれで、わずかな例外を除いてさほど珍重されていなかったようであります。作風が大きくことなるとは言え、日本でも螺鈿をつくっていましたので、これをわざわざ唐物と見なすことに抵抗があったのかもしれません。

その反面、彫漆器が日本では直接模倣されることがほとんどなかったのに対して、元から伝わった薄貝の螺鈿の技術は、日本における螺鈿製作の中に徐々に取り入れられていきました。

高麗と宋、元の間でも漆器は往来しましたが、資料に恵まれず詳細は不明です。高麗史に記録された1072年、高麗から宋への進奉品には「銀をちりばめた」、つまり金属板を用いる平脱の技法で装飾を施した漆の箱と長刀が記録されています。対する宋から高麗へですけれども、1078年、宋の使いから国王に対する賜物の中に、「金銀葉で装飾した」衣箱というのが挙げられています。つまり、双方とも平脱の漆器を贈答していたということになるわけなのですけれども、これらの作風の違い等については不明です。

さて、高麗と言えば大変精緻な薄貝による螺鈿が大変有名です。1123年、北宋の徽宗皇帝の使者が高麗に渡った折に、「螺鈿の工、細密にして尊ぶべし」というふうに称賛しているように、高麗螺鈿の作風は12世紀の初めには朝鮮半島に螺鈿を伝えた中国人を驚嘆させるほどの水準に達していたことが明らかであります。限られた遺品をもとに、外来の漆器が国内漆器製作にどの程度刺激を与えたかどうかを知ることは大変難しいのですけれども、宋、元の中国漆器と高麗螺鈿との間には明らかに作風の類似点がありまして、影響関係を想定することが可能です。

一方、高麗と日本との交渉は中国ほどには盛んではありませんでした。日本に伝世する比較的多数の高麗仏画や高麗青磁の大半は、朝鮮王朝との交易が盛んに行われた14世紀の末から16世紀にかけて将来されたものと考えられていまして、高麗との直接の交易によって運ばれたものが含まれるかどうかは不明です。世界じゅうに伝世する高麗螺鈿の遺品は、現在確認されているところ20点にも満たず、その半数ほどが日本に残っています。それは注目に値するのですが、これらも恐らく大内氏による交易等によってもたらされたものと考えられます。

日本から高麗へは1073年、日本の商人が高麗政府に「螺鈿鞍骨」のほか、漆器と思われる品目を献上しています。これらの品々は、高麗経由で宋に輸出されることもありました。

15世紀から16世紀前半にかけてのアジアは、明を中心とした新たな関係の形成によって大きな変貌を遂げます。政治・外向的側面では、明の光武帝、永楽帝らが即位後、ただちにアジア諸国の王に使者を遣わして朝貢を要求し、高麗や日本のほか、東南アジアの多くの国家が朝貢関係を結んでいます。こうして明の朝貢冊封システムが東アジア全体を覆うことになりますけれども、必ずしも秩序は貫徹したものではなくて不安定なものでした。

一方、経済的には明の海禁と積極的な国家的貿易政策がアジアの交易圏を飛躍的に拡大することになります。ここで特筆すべきなのは琉球ですね。明との国交を持つ正式な貿易国として最も盛んな活動を行っていた琉球が明の海禁政策を受けて、東アジアの中継貿易地点として一躍活躍し始めたことです。15世紀の初頭から琉球船が日本に頻繁に渡航するようになり、15世紀の半ば以降は博多や堺の商人による日本船が琉球に渡航することによりまして、朝鮮―対馬―博多―薩摩―琉球という交易ラインが形成されました。

また、ほぼ同じ磁器に南海産の物資を積んだ南蛮船、すなわち東南アジアの貿易船も日本や朝鮮の港に来港するようになりました。

明との朝貢貿易がもたらした唐物についてはよく知られますが、日本から明へ輸出された多種多様な漆器が愛好されたことについては余り着目されてきませんでした。ここに挙げるように、近年知られるようになった貿易品目の記録によれば、実に多くの種類の漆器が中国にもたらされていたことがわかります。

そして、その愛好の様子を最もよく伝えているのが明代末期の文人たちが記した著作の中の記述です。これらには、日本製漆器が文人たちの書斎空間に多数配置されていたこと、舶載品としてのめずらしさや優美な趣、品質の確かさなどが好意的に評価されたことが記されています。17世紀の前半には、北京市内の骨董市においても日本製漆器が売買されて、その多彩な品目や形態の複雑さ、紙のように軽く丈夫な品質などが称賛されています。日本製漆器については、「奇なり」とか「古雅」であるとか「精麗」であるとか「巧妙」であるとか、好意的な言葉で語られています。

日本漆器の愛好は、蒔絵の模倣という方向でも展開しました。蒔絵を模倣した描金という技法は、日本の蒔絵技法とはかなり異なるもので、用いる金の量が少ない疑似技法に過ぎません。しかし、これが明代以降に大変発達しています。こちらのスライドが明のころにつくられた描金の中国製の漆器であります。

さらに、清の宮廷においては、舶された日本製の蒔絵漆器と中国製の描金漆器とがともに愛好されたことが知られます。これは清の宮廷をあらわす絵画なのですけれども、この美しい女性のちょうど頭の後ろのあたりですね。明らかに日本製の手箱と思われる漆器が飾られています。

また、この女性が座っている前に置かれたテーブルなのですけれども、こちらは中国製の描金の漆器、右に映しているようなものに相当するようなものが描かれていますが、このように実際に清の皇帝のコレクションの中に、大変たくさんの日本製漆器が集められています。次にお見せするのは乾隆帝に皇后が送った手づくりの火打袋を入れるために、日本の蒔絵の箱が使われているという例です。

さらに、雍正帝は官営工房をつくって描金漆器の製作を保護しました。これはその官営工房でつくられたものですけれども、描金といっても蒔絵に大変近い高度な技術に達していることが伺われます。

この時期は、朝鮮王朝と日本との間でも盛んな交易が確認されています。朝鮮時代の螺鈿、いわゆる「李朝螺鈿」は高麗螺鈿とは打って変わって、大振りで中厚の貝片を用いたおおらかな雰囲気な作風ですけれども、これが日本人の感性に訴えるところが大きかった

と思われまして、例えば右に映しています本阿弥光悦がつくったお経を入れる箱のように、李朝螺鈿の直接影響下に製作された漆器が少なくありません。

以上、東アジアの海を巡る貿易と漆器の移動状況を概観してまいりましたけれども、アジアの対外交渉史を強く特徴づけるのは、外交と貿易、政治と経済とが一体化した朝貢冊封システムを建前としていた点です。つまり、漆器は主として外交上の贈り物として往来し、さらに異国の珍しい産物として普及したわけです。各国とも実用品としての漆器は自国で充分に賄える状態であったために、流通する漆器には特産品としての需要にこたえ得るエキゾチックさ、明確な特色が求められたわけです。お互いの製作の場において、外来漆器が若干の刺激を与えることはあっても、それぞれの国の中の独自性を尊重する方向を見失わなかったのは当然でありました。言いかえれば、どこの国でもつくられていた螺鈿のように、互いに共通する技術や似通ったもの同士では、比較的短期間のうちに影響を与え得ることが多いのに対して、例えば中国では彫漆、日本では蒔絵のように、その国でしか行われていない完全に異質な技術が導入されるのには、それなりの時間を要しました。このように東アジア共通の工芸技術である漆器は、海を通じて密接な関係を保ちつつ、異国からもたらされる新しくて変わった様式と、各自の民族性の均衡点に、おのおのの様式を見いだしていったと言えるでしょう。

それが16世紀以降、ヨーロッパ勢の参入によって漆器はアジア内のみならず、さらに広範な地域で流通するようになります。ポルトガル人によって日本製の漆器は、ヨーロッパやインドやマカオなどに運ばれ、逆の航路をたどったスペイン人によっては中南米にももたらされ、さらにオランダ人はインドやシャムやカンボジアなどにも漆器を輸出しております。これに加えて中国やベトナム、その他の地域でもヨーロッパ向けの輸出漆器が製作されまして、西洋ではシェラックという漆とは全く違う材料を用いた模造漆器の製作も行われるようになります。このように日本製輸出漆器の周辺には、多様な産地の多様なマーケットをターゲットとした漆器が流通していたことを念頭に入れる必要があります。

今、ここでは漆器の注文者、制作者、そして受容者との関係で整理をしてみたのですけれども、大変多様な組み合わせがあります。貿易商品といっても、その中には贈答品と一般の交易商品とがあったので、組み合わせはさらに多様になります。それぞれによってつくられた目的や漆器の機能、役割というのが異なりますので、この注文主、制作者、受容者たちのそれぞれの意図が反映されることになって、輸出漆器の様式というのが形づくら

れていったと考えられるわけです。

西洋向けの輸出漆器がそれまでアジア内で移動していた漆器と最も異なる点は、それらが主として西洋人の直接的あるいは間接的な注文によって製作されたために、消費地由来の形態を持つという点であります。最もわかりやすいのは箱の形式でして、日本の箱の場合、箱の蓋と身の部分はまるっきり離れて置かれる、つまり分れているのですけれども、輸出用の箱は蝶番でとめられています。ヨーロッパでは蝶番でとめないと落ち着かないということで、それが変わっています。

日本や中国や朝鮮などで交易品として扱われた漆器の具体的な姿を、すべて遺品として確認することは大変難しいのですけれども、現存する唐物漆器だとか文献記述を見る限り、東アジア内では基本的に国内向けにつくられた漆器と同じものが、そのまま輸出されていたと推測されます。東アジア諸国の生活様式は西洋ほどにはかけ離れていませんでしたので、調度類の形式や形態も同じようなものであり、使う人の使い勝手に合わせて特別に輸出用の商品を製作する必要はなかったわけです。逆に、多少の形態の相違は地域的な特色と見なされ、むしろ歓迎されたと考えられます。

ただし、輸出の際に、外国向けとして選別の行為が行われる余地はもちろんありました。

先ほど明代の文人たちの記録のこと触れましたが、その中に日本製漆器の中でも内部に多数の小箱をおさめる入れ子形式の小箱が大変珍重されたという記事があります。まさに小さなものをつくる日本の職人の器用さを反映する品目と言えます。

実は、欧米各地に伝世する日本製漆器の中にもヨーロッパ由来の形態を持たずに、国内仕様の特徴を示した遺品が含まれています。西洋に向けても日本国内市場向けの漆器が輸出されていたのですね。これには２つの可能性が考えられまして、第一には、オランダ人たちが特定の注文をせずに、出入りの商人などから国内向け漆器を仕入れて持ち帰った場合、それともう一つは、中国船がアジア海域内に持ち込んだ漆器を西洋人が例えば中国で入手し、西洋に持ち帰った場合というのが想定できます。オランダ東インド会社は、17世紀の末からオランダ向け日本製漆器の取り扱いをやめていますので、18世紀以降はこのような国内向け漆器の輸出の割合が増加したと考えられます。

例えば、大変有名なマリー・アントワネット旧蔵の漆器があるのですけれども、その大半が国内仕様の漆器であります。中には、興味深いことに日本との貿易を行っていた中国人の名前を記した紙が張りつけられた漆器もありまして、中国経由でヨーロッパに渡った可能性が高いことが指摘されています。興味深いことに、このコレクションの漆器には、

中国でも人気の高かった入れ子式の複数の小箱を伴うものが多く含まれています。

輸出漆器への西洋人の関与は、形態ばかりではなくて装飾にも及んでいます。例えば、南蛮漆器の様式は日本の伝統的な漆器とは異なり、大変エキゾチックな雰囲気があるんですね。それは螺鈿を多用していること、それに文様がとても密であることなのですけれども、このデザインの源泉としては、インドの代表的な工芸品であった螺鈿細工を想定することができます。

今、左に映しているのは日本製の南蛮漆器の中でも、大変珍しい例なのですけれども、魚のうろこのように貝を張りつけて、１枚１枚の貝を鋲でとめつけた技法を用いています。この技法は、明らかにインドの北西部にあるグジャラート地方というところでつくられた螺鈿細工に由来する技法です。ポルトガル船は日本に到達する前に、インドを初めとするさまざまな港に立ち寄って、その特産品を手に入れていました。当時のヨーロッパの人たちにとって、インドも中国も日本も東方の未知の国の領域に属していたわけですけれども、その中でもインドは最も身近で、よく知られたアジアだったわけです。インドの螺鈿細工は、東洋の憧れを象徴する品目としてヨーロッパの王侯貴族に既に知られていたので、そういったより近いアジアの装飾を取り入れるというようなことを行ったと考えられます。

これに比べますと、黒漆の余白を大変多く残して金色のゴージャスな高蒔絵を組み合わせた江戸時代の輸出漆器の様式は、日本の本来の蒔絵装飾の本質をよりよく理解したものと言えます。南蛮漆器からオランダ様式への変化は、西洋人の日本に対する理解度の差を示しているとも言えるわけです。

ただし、この江戸時代の輸出漆器の様式が国内向け漆器と全く同じであったかというと、そうではありません。その装飾があくまでも西洋人が受けとめることを前提に、西洋人のエキゾチシズムを満足させるためにあらわされていたことは、例えばこのように王朝風の建物や珍しい装束を身につけた人物を多く描くこと、あるいは中国風の主題や唐子を描いたりするようなこと、あるいは当時ヨーロッパでシノワズリーと呼ばれる東洋風の図案が流行していたのですけれども、それに似たような楽園のような水辺の風景を描くこと、そういったところから輸出漆器に求められた様式というのは、現実の日本がどうであれそれは関係なくて、西洋人が勝手に思い描いた東洋のイメージが必要とされたということがわかります。

さて、アジアの漆器流通圏に西洋市場という新しい要素が加わることによって、アジアの漆器のありよう自体が変容していく側面もありました。18世紀から19世紀にかけて広東

から盛んに輸出された漆器、左なのですけれども、これは蒔絵を模倣した描金技法による漆器です。右は、19世紀に長崎から輸出された螺鈿漆器なのですけれども、ここでは結局、日本と中国を代表する技法の逆転現象が起っていることになります。さらに、清の皇帝の漆器のコレクションの中には、例えば右の蝶番をつけたヨーロッパ風の形態に蒔絵風の描金の技法でつくられたものが中国の皇帝のためにプレゼントされたり、左はヨーロッパで中国風と考えられてつくられたポットの形に日本の蒔絵を施したものがありますけれども、こういうふうにアジアの海と世界の海がつながったことによって、流通する漆器の様式が領域を越えてまざり合って、各国の違いを意識しない「アジアの」漆器の様式が生まれていったということが見られるわけです。このように日本から海を渡った大量の漆器は、それぞれの漆器がつくられた事情にしたがってさまざまな表情を見せていますけれども、そのスタイルの変化には、日本と西洋との間を隔てた距離の変化が反映されていると言えると思います。

これで私の報告は終わらせていただきます。（拍手）

○司会（三輪）

日高先生、どうもありがとうございました。とてもきれいな美術品を拝見して目が覚めました。ありがとうございます。

○司会（三輪）

それでは、３番目のスピーカーでおられます井上章一先生、国際日本研究専攻・教授で、ご専門は建築士・意匠論です。先生の現在のご研究のテーマは、風俗、意匠など目に見えるものを通じた近代日本文化史の再構成というテーマでお話をいただきます。

報告の内容、題目なのですけれども、「日本のタヌキと世界のネコ」というお題でいただいております。では、よろしくお願いします。

日本のタヌキと世界のネコ

国際日本研究専攻　井上　章一　教授

よろしくお願いします。パワーポイントは使いません。私は、そもそもパソコンを持っていません。よろしくご了解ください。

薬局、日本の薬屋さんの風景を思い浮かべて見てください。世界に類例を見ない様相が見えます。薬局の店先にカエルやウサギやゾウの人形がしばしば置いてあります。こんな薬屋は日本以外どこにもありません。

ケンタッキーフライドチキンの店先にカーネルサンダースの人形が立っています。あれは1970年代に日本でこしらえられました。アメリカのケンタッキーフライドチキンに、カーネルサンダースの人形を置いている店は、ただの一つもありません。日本にやってくるアメリカ人観光客は、あれを珍しがって横でよく記念写真を撮っています。最近は、アジアを中心にカーネルサンダースの人形は広まり出しています。だからといって、ああ、ケンタッキーの店だからあの人形が置いてあるとは考えないでください。あれは日本からの文化輸出によるものです。

ああいうものを日本のお見せが置き始めたその根っこには、まじないの人形があると思います。お客さんがたくさんやってきますようにという願いを込めた人形が日本には伝統的にありました。ダルマであり、信楽のタヌキであり、招き猫であり、福助人形です。ああいうものを店先に飾る、店の中に置く習わしが日本には古くからありました。それがポリエステル強化プラスチックの時代になり、ケンタッキーフライドチキンの人形とかになっていったんだと思います。

ケンタッキーフライドチキンって最初は全然売れなかったんですが、アメリカのエージェントがやってきて、日本の町を見て不二家のペコちゃんを見つけたんですよ。それで、ああ、日本人はこういうのを好むんじゃないかというので、創業者のハーランド・サンダースを人形にしたのが始まりなんだそうです。

ところで、先ほど申し上げましたように、これは日本的なものだと思いますが、世界で見かけることがふえています。とりわけよく見かけるのが招き猫です。私は20世紀の終わりごろからヨーロッパのいろんな町で招き猫を見かけるようになりました。最初は世界が市場経済で結ばれているので、こういうものも普及しているんだなと。盆栽も普及したり、俳句が普及したり、生け花が普及したり、寿司が普及したりするのと同じだと思っていま

した。ですが、諸外国でタヌキの置物はまず見かけません。同じようにグローバリズムが浸透しているのならば、ネコだけが普及してタヌキが普及しないのはなぜなのかという疑問に突き当たります。

2004年にリオデジャネイロで私はタヌキを見ました。信楽焼ではありません。合成樹脂のタヌキです。そのタヌキには――すみません、あえて申し上げます――前にぶら下がっている金玉がありませんでした。そこで思ったのです。ああ、あれさえなければ国境を越えられるのだと。逆に思いました。では、我々は何であんなものをこしらえたんだろうと。不思議ですね。

宮崎駿のアニメに「平成狸合戦ぽんぽんこ」というのがあるのを御存じでしょうか。1994年の映画です。タヌキがたくさん出てきます。そして、タヌキの金玉が膨らんでしまう場面もいっぱい描かれています。日本文化を教えるために、アメリカなんかでこの映画を取り上げることがあるらしいです。宮崎のエコロジー、日本的な自然を生徒に語ろうと思っているのに、生徒はタヌキの金玉が膨らむ場面にだけ反応して、とても授業にならなかったという話を何人かのアメリカ人から聞いたことがあります。

私自身の体験を申し上げます。20年ほど前でした。オランダのおじさんと一緒に京都の産寧坂を歩いていました。当時、あの辺には役者の松方弘樹がやっている店がありました。いわゆるタレントショップです。その店先に巨大な信楽焼のタヌキが置いてありました。何と顔だけは松方弘樹になっていました。それを見たオランダ人は、「これは日本の悪魔ですか」と尋ねました。私は「違う。彼は日本のトップスターだ」と答えると、日本人はわけのわからん民族だと関心していました。

これも下品ついで言いますが、タヌキの歌を聞いたことがないでしょうか。「たんたんタヌキの金玉は、風に吹かれてぶらぶら♪」。ありますよね。学校でこの歌、習ったことがありますか。テレビやラジオで流行り歌として聞いたことがありますか。ありませんよね。にもかかわらず、北は北海道から南は九州まで全国津々浦々の方々がこれを歌えるのです。私はこれをメディアを介さない、いわば下からのポップカルチャーだととらえているのです。これこそが本当の民族歌謡、国民歌謡。まあ、こんな話はやめましょう。ですが、これは元歌は聖歌です。「まもなくかなたの」という聖歌、あるいは――ちょっとカンニングしますね――「Shall we gather at the river？」というゴスペルソングが、いつの間にか日本で神をも恐れぬ替え歌になったのですよ。

「バウンティフルへの旅」という映画があります。アメリカ映画です。これは世の中に

絶望した男が最後に宗教で救われる映画です。フィナーレで全員がゴスペルソングを合唱します。このゴスペルソングが「たんたんタヌキの♪」何ですよ。恐らく多くの日本人が見たらとても感動できないと思います。何でこんなところでタヌキやねんというふうな印象を持つんじゃないでしょうか。

タヌキの金玉が膨らみ始めるのは17世紀の終わりごろからです。1697年に刊行された「本朝食鑑」という文献に、タヌキについて「陰嚢伸ぶるものの広く、長さ四、五尺に及ぶ」というような記述があります。

目に見えてふえるのは18世紀の終わりごろです。これについて科学史家の中村禎里先生がある類推をしていらっしゃいます。鍛冶屋のフイゴ。フイゴってわからはりますよね。空気ポンプですよね。あれにタヌキの皮を江戸時代の中ごろによく使うようになったらしいです。金箔を薄く引き延ばす素材としてもタヌキの皮を使うようになったらしいです。金細工にタヌキの皮を使う、ふいごのように空気圧が膨らむ工具としてもタヌキの皮を使う。金が膨らむタヌキの皮、この技術史的な背景があってタヌキの金玉は膨らんだんだと、膨らむようなものとして描かれるようになったのだと中村先生は考えておられます。すごいでしょう。こんなテーマにも研究者はいはるんですよ。

ですが、私はこの技術史的な説明にやや物足りないものを感じています。中村先生の見解に反論するつもりはありませんが、私はもうちょっと違う部分があるように思います。私たちのイディオムを考えてみてください。意気地なしの男の子に母親はよくこういう言い方をしないでしょうか。「そんな金玉の小さいことでどうするんですか」。私は子供のときに言われたことがあります。言われて思いました。金玉が大きかったらええのかと。このイディオム、変だと思いませんか。まるで人間の男の子の志が金玉に宿るかのような形でイディオムがこしらえられているわけですよ。けつの穴の小さいやつという言い方もありますけどね。あれも不思議ですよね。尻の穴の大小で人間の気持ちが推し量れる、そんなイディオムがどうしてできたのでしょうか。国立国語研究所の先生方に考えてほしいものだと思うのですが。

ああ、そうそう。あいつには全部俺の心が読み取られている、心の奥深いところまで悟られてしまっているという言い方に我々は、男だけかもしれませんが、「あいつには金玉の根っこまでつかまれている」という言い方をします。頭に心があるとか胸に心が宿るという言い方は世界じゅうにあると思いますが、金玉に心が宿るというふうに考える民族がほかにあるのでしょうか。

そもそもあそこをなぜ我々は金と呼び、玉と呼ぶのでしょうか。英語訳すれば、golden jewelryですよ。黄金であり、かつ宝石。そういう大事なものとして私たちがあそこをとらえた背景に、何か東洋医学とかがあるのかな。私にはそこはまだ突き詰められていませんが、考えてみたいところだと思っております。

随分タヌキにこだわりました。ネコの話に話に移ります。招き猫は何から始まったか御存じでしょうか。ネコが幸いを招くという言い伝え自体は昔からあります。ですが、手招きをする形のあの人形ができ始めるのは、まあ幕末ぐらいからです。

ついでに言うと、信楽焼のタヌキの人形ができるのは、もともとは祇園あたりでつくられだしました。20世紀の初めごろです。信楽が取り入れたのは1920年代ぐらいです。

招き猫に戻ります。江戸時代の土人形でネコをこしらえ出すのは19世紀の中ごろです。最初に置かれ始めたのは遊廓の縁起棚です。遊廓というのは昔の売春施設ですが、仏壇でもない、神棚でもない、縁起棚という棚が玄関わきにありました。その縁起棚に座布団を置いて、その座布団の上に招き猫を置いていたのです。そこが始まりです。

そこに招き猫が置かれる前は、男の一物をかたどったまじない人形が置かれていました。そう、招き猫が広がる前は、そこにチンチンの置物が置かれていたのです。そのチンチンに向かって女郎さんたちは、きょうもいいお客さんが来ますようにとお祈りをしたはったわけです。

ところが、幕末ぐらいに西洋人がやってきて、その風景を見てやはり驚きました。神社の境内の店に、チンチンの張り型がまじないものとして並んで売っているのですね。それを見ても驚いたわけです。そして、こう考えました。こいつらはチンチンを拝んでいる民族なんだと。チンチンを拝んでいる民族とキリスト教徒がまともに対話ができるわけがないと、そう考えたわけです。不平等条約の背後にこれがあったかもしれません。

江戸幕府も儒教的精神にのっとってチンチンの置物を禁止はしていました。だけど、かつてのスピード違反程度で、余り本気で取り締まってはいなかったんです。ですが、西洋人と出会うようになってからは、かなり腰をすえて取り締まるようになりました。とりわけ明治の警察による摘発はきつくなったと思います。

明治５年だっけ、６年だっけ、もう覚えてないのですが、そのころを回顧したある新聞記事で私は驚いたことがあります。桜田門の警視庁が一斉摘発に乗り出して、チンチンの置物を数万本集めるんですよ。それが桜田門の前に山になったそうです。処理に困った警察は、それを隅田川に流しました。あれは下のほうがやや重たくなっているので、水につ

けると立って浮くのですね。それが波に揺られながらチャッポン、チャッポン、出たり入ったりしながら、数万本、チンチンが東京湾に流れていく風景を回想している新聞記事を見つけました。えらいことやらはったんやなと。今、このシーン、映画で撮れないですよね。

そうやって遊廓の縁起棚を初めとする水商売のややいやらしい営業で好まれていた座布団の上のチンチンにかわり、同じところへ置かれ始めたのが招き猫です。じつは、チンチンから猫への移り変わりを示す途中経過みたいなものが結構残っているんですよ。あるいは、その写真も。ネコの顔がかいてあるのだけれども、形はチンチンとか、チンチンにネコがしがみついて手招きしているやつとか、あるいは招き猫なんだけれども、それをつかんで上に上げると中からチンチンが出てくるとかというようなものがあります。私自身、写真ではなしに実物を見たことがあります。

ここで思ったのですよ。招き猫というのは文字どおりチンチンがネコをかぶったものではないかと。そこからこうも思ったわけです。あの「ネコをかぶる」という言いまわしの語源は、ここにあるのではないかと。「あの人、ほんまはやらしい人なんや。何か上品ぶって猫をかぶっているけど……」と言いますよね。どうして猫をかぶることが下品さを覆い隠すことになるのか。それはチンチンにネコをかぶせた歴史の賜物ではないかと私は考えています。猫をかぶるという言い回しは、日本国語辞典第２版によると、1860年代ぐらいが初出らしいです。となると、どうもチンチンがネコをかぶり出した時期やなと私は今踏んでいるのです。江戸時代の中ごろに猫をかぶるという言い回しが見つかれば、私はこの説を捨てます。捨てますが、とりあえず今はこの議論を喜んでいたいと思っています。

実を言うと、あの手の置物というのは、大なり小なり生殖器崇拝なんですよ。例えば、だるまって横にすると立つでしょう。ああいうのもやっぱり勃起力を込めているのでしょうね。よく店に米俵２俵を置いて、その上にだるまを置いているような形がありますが、あれは米俵２俵が金玉で上がチンチンなんでしょうね。

それと、福助人形も気持ちをややエッチにして頭のてっぺんを眺めてください。ああ、なるほどチンチンがルーツなんだなというのが偲べると思います。

商売繁盛のまじないの置物というのは生殖器崇拝がルーツで、それをいまだに表へあらわしているのが信楽焼のタヌキなんだと私は考えます。

ただ、チンチンのほうは、猫をかぶったおかげで世界じゅうに普及するようになりました。金玉をそのままさらしているタヌキは国境を越えられません。

国境を越えられないのですが、このごろちょっと何やなと思うのは、川崎の金山大師というの御存じでしょうか。かなまら大師と呼ぶ人もいます。このごろはすくなくなっている神社のひとつだと思いますが、チンチン祭りというのをやっています。御神体は巨大な桃色のチンチンです。それを御神輿に乗せて町を練り歩きます。

これは英語の刊行案内書に多分載っているのだと思います。参拝客の半数以上は西洋人です。西洋人の女の子たちがチンチンをかたどった巨大な帽子をかぶってキャーキャー言っている姿を見ると、まるでウッディ・アレンの映画を見ているような幻想に私なんかは陥ります。

どういうことでしょうかね。今はヨーロッパでも一神教的なキリスト教などというものは、もう支配力を持っていないのだと思います。生殖器崇拝の催しなんかもおもしがれるように人々の気持ちはどんどんなってきているんだと思います。

もともとは、19世紀の中ごろに西洋人が不快がったおかげで幕府も明治維新政府も取り締まりを強めた、それで全国から追放されていったその残りかすのようなものがある川崎の金山大師に西洋人が群がっている。何ということでしょうかね。そうなると、ますます金玉が哀愁を帯びてくるというのか、どういうことなのかなと思いますね。

カーネルサンダースの人形やペコちゃんや、あるいはちょっと古い話になりますが、北野印度カレーのビートたけしに生殖器を思い浮かべる人はいないと思いますが、ああいうものも根っこには生殖器崇拝があって、それが現代のポリエステル強化プラスチックの時代になって様変わりをしたんだと思いますね。

1985年に阪神タイガースが優勝をしたことがありました。あのときは、関西一円が大騒ぎでした。道頓堀の戎橋では優勝の胴上げというのがありました。のみならず、あの汚い道頓堀に多くの人が飛び込んでいきました。あのならわしはこの時から始まったんですね。そのときに、「１番、真弓行きます」と言って飛び込んだり、「掛布、行きます」とかと言って飛び込んだりしたのですが、優勝の立役者であるランディ・バース、「バース」と言って飛び込める人はいませんでした。

そこで、優勝で理性を失った阪神ファンたちが目をつけたのが、ケンタッキーフライドチキン道頓堀店に置いてあるカーネルサンダースでした。カーネルサンダース本人は体重96kgあったそうですが、人形自体はがらんどうですから約15kgほどです。店の人は必死でとめたらしいですが、阪神ファンはそれをひっぺがして、そしてあの道頓堀にたたき落としたわけです。これはすごいですよ。カーネルサンダースが空中に浮かぶんですよ。グリ

コのネオンサインの真横で。物すごいシュールな映像やと思うのですが、この翌年、阪神タイガースはたしか３位になり、次の年、最下位になり、その後、大変弱い球団になりました。大阪では、あるいは関西一円では、何も悪いことをしてへんのに阪神ファンによってあの汚い川に放り込まれたそのおかげで、カーネルの生霊が阪神に呪いをかけていると、「探偵ナイトスクープ」という番組からこういう言い回しが出たのですが、その人形が20数年に振りにこの間見つかったんですよね。今、甲子園球場の横で何かちゃんと洗われていると聞きますが。

こんな話をするんじゃない。もういい。とにかく私が考えたいのは、アニメーションとか漫画のように、メディアに増幅されたものの世界に普及している文化ではなしに、だれかがこれを海外に広めようとか何とか思わずに、下から膨らんでいくホップカルチャーとでも言うのでしょうか、こういうものに目を向けたいなというふうに思ってますね。先ほどのたんたんタヌキの歌も含めてね。なかなか研究者が目を向けないテーマなので、扱うことは難しいと思いますし、うちの大学院でもいろんな先生方が大学院生たちに、「井上さんがやっているようなことをまねしてはいけません」というふうに伝えているらしいので、私がこういう場所でしゃべることも問題があるのではないかと思うのですが、そういう志を抱いている研究者もいるということぐらいをお伝えして、私のお話をやめたいと思います。

どうもありがとうございました。（拍手）

○司会（三輪）

先生、とても興味深いお話をどうもありがとうございました。これから招き猫とかタヌキの人形を見るたびに、先生のお顔を思い出すんじゃないかと思います。どうもありがとうございました。

○司会（三輪）

それでは、きょうのラストスピーカーですけれども、日本文学研究専攻の野本忠司先生にお願いします。先生のご専門は情報科学、言語工学ということで、現在のご研究のテーマは、電子資料館の高度化に向けた情報検索、抽出、インターフェースの研究及び自然言語処理の基礎研究。

きょうのご発表のテーマは、「計量分析によるに日米メディアの比較」ということで、野本先生、よろしくお願いします。

計量分析による日米メディアの比較

日本文学研究専攻　野本　忠司　准教授

どうもありがとうございます。私は情報科学の出身でして、どちらかというと理系なのですね。今回のテーマ、「世界の中の日本、日本の中の世界」もどちらかというと工学的な立場から考えてみたいと思います。今回のテーマが「計量分析による日米メディアの比較」で、特にマスメディアの今をはかるというタイトルでお話をしたいと思います。

まず、国内外報道がどのようにずれているかということを考えてみたいと思います。これは2009年４月に世界的に新型インフルエンザというのがはやりました。これで、メキシコを発端にしまして全世界に広がって、死者も数千人規模に達したという事件です。この事件について、日本のメディアとアメリカのメディアで、対応の仕方が非常に異なっていたということが知られています。

国内メディアは、これは５月の初めの時点なのですが、感染者がほとんどいないのに連日集中放火的な報道がされていました。対して米国メディアは、この時点で感染者が2,000人近くいたのにもかかわらず、余り報道されていませんでした。

これで、日本でどうなったかと言いますと、店頭からマスクが消えたり、イベントがとりやめになったり、学校が休校になったりということがありまして、これは皆さん、よく覚えていらっしゃるかと思うのですけれども、どうして同じ現象に大してこんなにメディアの対応の仕方が日本とアメリカで違うのかという疑問が研究の動機になっています。

これは、現在のＷＨＯの新型インフルエンザの統計なのですけれども、2009年5月から10月ごろまで感染者数はアメリカだと1639人で、日本だと3人です。

こちらのほうは日本の関東キー局、ＮＨＫやテレビ朝日、日本テレビのいわゆるネットワーク系のテレビが、この新型インフルエンザについて報道した時間を割合として示したものです。これは週ではかっているのですけれども、例えば5月4日から始まる１週間に、その４割か５割が新型インフルエンザ関連だったということがわかります。

対して、これは米国メディアの報道量をＰＥＪ(Pew Center for Excellence in Journalism)というシンクタンクが調べたものなのですけれども、新型インフルエンザはこの辺なので、経済危機の話がトップになっています。したがって、アメリカでは新型インフルエンザというのは、これだけ感染者数がいたにもかかわらず、それほど注目されていなかったということになります。

今回の話は、これは手作業で調べないとわからない数字なのですけれども、これを自動的に抽出する方法を考えようということです。

現在のところ、幾つかの機関がこのようなメディアの分析をやっているのですけれども、大体手作業で分析してその報道量の多さ少なさをはかっている例がほとんどで、自動的に抽出するという例はありません。したがって、先ほどのことを調べようと思ったら、放送を逐一見て、あるいは新聞を逐一見て自分でそれを調べないとわからないわけです。

今のところ、現在インターネットが爆発的に成長していまして、ほとんど社会現象がインターネットの世界に反映されるようになってきています。したがって、インターネットを見ることによって、逆に社会がどうなっているかということがわかるようになっていきます。

ここでは、そのインターネットの情報を使いまして、このような情報開発の抽出ができるかどうかということを見てみたいと思います。ＰＥＪでは、毎週、アメリカのメディアの報道量を測定しています。これは多数の分析者を動員しまして、新聞記事を2,000か3,000読んで、新聞でどのようなトピックが取り上げられているかどうかということを統計量を出して、毎週報告しています。

このような感じで、週のトップ項目が毎週レポートとして報告されまして、例えばこの週ですと、例えばＩＭＦの前ディレクターがニューヨークのホテルでルームサービスに来た女性を強姦して逮捕されたという事件がトップになっていますね。このように現在のところ、アメリカでは、お金をかけて手作業で何が一番注目されているかというのを調べています。

ここでは、この指標を参考にしまして、機械的にこれを実現することを考えたいと思います。まずこの報道量の指標はＮＣと呼ばれております。先ほども言いましたように、アメリカの現在の動向をわかりやすく示す有効な指標なのですが、アメリカでしか使えないのですね。だから、例えばこれを日本とか中国、韓国で同じようなことをやることはできない。

もう一つの問題としましては、人手に依存するため集計に時間がかかり、即時性がありません。したがって、今日どうなっているか、昨日だったかというのはわからないですね。１週間待たないとその週の報道量というのはどうなっているのかわからないので、その点で今のこの瞬間のメディアの関心事がどこにあるのかというのを知ることはできない。これをできるようにしようというのが今回の話です。

システムイメージは大体こんな感じでして、インターネットあるいは放送局から情報を収集しまして、そこでこの中からクラスタリングという文章をグループ分けする手法を使いまして、その中から大きな、特に重要なテーマをそこから拾って、それをこのように表として提示するというシステムです。

具体的な処理の流れをちょっと説明しますと、まずインターネットからこういう新聞情報をいっぱいとってきまして、それでこう幾つかの固まりに分けるのですね。固まりに分けても、これが何を意味するかということを言わないといけないので、これを何らかの概念を付与するということを考えます。

そこで、今回はウィキペディアを使いまして、それをやろうという話です。まず、何らかの新聞記事の固まりを持ってきて、それをウィキペディアに照らし合わせて、これに一番近いページを拾ってきます。その上で、そこから一番近かったページのタイトルをこの文書の概念だとしようと考えるわけです。これがさっきの新聞の固まりのテーマであるというふうに主張するわけですね。これだとウィキペディアの概念自体がそれほど多くないので、メディアでカバーしているトピックをすべて拾うことはできません。

そこでここでは、ウィキペディアを分解し、概念を増やすことを考えます。ウィキペディアというのは大体このような構造になっています。まずタイトルがあって説明があって、その下にサブトピックというかサブタイトルがあって説明が続くというような構造をとっています。

これを細かく分解します。こうすると、これはさっきの例ですけれども、最初の１ページがこの上と下に分れます。１つは、これは福島原発のページなのですけれども、これを福島原発の世界的意義のページ、それから経過概要のページに細分化します。これによって概念をここから新たに２つ派生させることができます。一つは、福島原発の特に経過に注目したページ、もう一つは福島原発の世界史的な意義について注目したページで、あるいは概念であるというふうに考えます。こうすると、ウィキペディアからさまざまな小さい概念を生成することができまして、それを先ほどの手法に従ってトピックを見つけるときに使います。

日本語から再構成したウィキペディアの概念数は元の4倍の300万、英語からだと元の2倍の大体600万ぐらいの概念を生成できます。これらをすべて使って、先ほどのニュースのトレンドが何かということを見つけるときに使うわけです。

ここら辺は細かい話なので余り気にしなくてもいいと思うのですけれども、文章を分類

するクラスタリング技術としては、標準的なものを使っています。収集の方法としてはインターネットから日米報道記事を週単位でまとめて、ランダムに400の固まりを生成します。そこで、先ほどのウィキペディアを使った手法でトピックを付与していき、その中で特に重要なものをランキングして表示するという流れになります。

これが収集対象のメディアです。アメリカのメディアだと大体メジャーなところをカバーしています。ニューヨークタイムズとかヤフー、ＣＮＮ、ＭＳＮＢＣ、フォックス、ＵＳＡトゥデー、ワシントンポストとか、こういう割と大手のメディアを対象に情報収集します。

国内メディアにつきましては全国紙ですね。例えば、朝日、中日、ブロック紙も含みますけれども、Ｊ－ＣＡＳＴ、時事コム、河北新報とか、あと毎日新聞、読売、日本経済新聞とか、あとＮＨＫ、ＴＢＳニュースなど新聞以外に一部放送メディアも入っています。

これをすべて記事を片っ端から収集して、先ほどの手法で幾つかの大きなテーマ別に固まりをつくり、それにウィキペディアを介して意味を与えます。

これが震災直後の１週間の状況です。これは先ほどのアメリカの機関が集計して報告した結果です。１番目が、Japan Quake/Tsunamiで大体震災と津波。特に、これは放射能漏れについて書かれた記事が多く入ってます。その次が中東の情勢不安の問題ですね。これが人間がつけたラベルです。

一方、自動的に抽出された例を見てみますと、アメリカの予算関係の話がトップに来ていますが、２番目には福島第一原発の問題がちゃんと拾えています。３番目には、リビアの多国籍軍による介入の話が来ています。

こういうふうに、この結果を見ると、人間の結果と自動的に集計した結果が割と対応しているのがわかると思います。

これは3つ時期を見た例なのですが、ちょっと見にくいのですけれども、これは去年７月の終わりの週を見ていまして、これは人間がつけた例ですね。一番上にウィキリークスの話が出ていて、次に移民、要するに移民排除法というのがこの当時、アメリカが盛んに議論されていまして、それが話題になっているということはわかります。この時期でこの手法を使いまして分析するとこうなっていまして、これに対応するトピックがこことここにあらわれています。だから、割と高いところに人間が重要だと判断したものが自動的な手法でも割と拾えているということがわかります。

あとは、ここでは一番上がウィキリークス関係です。Afghan war document leakという

のがまさにウィキリークスの話でして、これを見ますと、やっぱり自動的な手法でも人間にある程度相当するような分析結果を精査することができるということがわかります。

国際メディア、特にアメリカが日本について、どういう記事を重要だと思って見ていたかという話でしたけれども、今度は国内メディアはどう見ていたかということを考えます。

これも3月14日から20日までの震災の次の週のメディアの状況でして、米メディアは、さっきの例と同じですけれども、福島第一原発の放射能汚染に注目していまして、こっちはやはりリビアの多国籍軍による介入と。日本のメディアを見てみますと、大体原子力の話がやっぱり上に出てきますが、リビアの問題も4番目にあらわれています。この時点では、割と日本のメディアとアメリカのメディアで割と注目するところが一致しているというのがわかると思います。

これは時系列的に見た例なのですけれども、この横軸が週の番号、だからその年の第何週目とかという番号を表しています。このグラフでは、10週目、11週目で放射能関係のトピックがどのように推移していったかというのを見ています。こっち側はアメリカで、こっち側が国内です。

10週目を見てみます。これは直後ですね。この週では、地震、津波の記事が多かったのですけれども、翌週になって放射能が漏れ出したということがわかると、急激にその報道量がふえます。これはアメリカなのですが、急にふえているのですが、翌週になるとだんだん低下していって21周目、これは5月の終わりですけれども、そうすると割と忘れさられつつあるということがわかります。

対して、日本は非常に多くて、落ち方がアメリカに比べると余り急激ではなくて、大体４月の終わりからちょっと少なくなってきて、5月の終わりになるとようやく落ち着いてきたかなという程度になります。

このとき政府関係、要するに官僚たち、あるいは議員たちが盛んに海外メディアの加熱報道ということを繰り返して言っていたのですけれども、この時期、実は、4月の頭ですけれども、ほとんどアメリカでは鎮火傾向にあったわけです。対して、日本のほうが放射能関係の記事が非常に多くて、日本のほうがかえって報道に関しては加熱していたということがわかると思います。

あと、おもしろいのはここなのですね。18週というのは、これはゴールデンウィークに相当します。ここになると、放射能関連の記事が急激に落ちるのですね。翌週になるとまたふえていくのですが、これの落ち方は、ほかのところから見てみると、割と奇異に見え

ます。恐らくこの時点では、メディア関係に何か暗黙の合意があって、放射能汚染関連事故の記事が少なくなったのではないかということが推察されます。

あとは、原発に関してもいろいろな見方ができまして、１つは放射能汚染に関するトピックですね。

もう一つは、原発の津波対策と地震対策はどうなっていたかという記事でして、こちらのほうはゴールデンウィークということに余り影響されずに、その後も高い関心をメディアの間では持たれています。

したがって、概念を細かくすることによって、より重要度の低いトピックを見つけることができるようになっているわけですね。これは今回のアプローチの１つの特徴ということが言えると思います。

これは、一番最初のほうでメディアの今を計るということを申し上げましたが、現在これを自動的集計して表にするということをインターネットでやっていまして、ちょっとデモをしてみたいと思いますが、これが今、きのうの状況ですね。一番上に来ているのが大統領選の話でして、２番目に来ているのがヨーロッパの中央銀行、要するにヨーロッパの債務問題ですね。

対して、日本はどうなっているかというと、こうなっています。ちょっと見にくくなっていますが、最初に来ているのがやっぱり原発事故の放射能汚染がまだ依然として高い関心を持たれています。あと、減税等とか京都議定書ですね。これはＣＯＰ17に関連して京都議定書に関する話題が増えているのだと思います。日本では、ヨーロッパの債務問題がどうなっているかというと、ここに来ています。トピックタイトルが2010年となっていますが、これは去年のページタイトルがそのまま使われているからです。ヨーロッパの債務問題については、たまたま去年の記事のほうが近かったということなのですけれども、大体この辺ですね。

したがって、日本とアメリカを比べるときに、これを見る限りアメリカのほうがヨーロッパの債務問題に対しては強い関心を示しているというのがわかると思います。記事数は171とか115という具合になっています。日本のほうは76ということなので、アメリカに比べると割と対岸の火事的な関心しかないのではないかと思います。これはきのうまでのデータを使っているので、ほぼ今に近いのではないかと思います。

ただ、現在の手法ですと、計算するための時間がほぼ１日必要なので、どうしても１日ぐらいのタイムラグが起きてしまって、今この瞬間のトピックがどうなっているかという

ことはわかりません。これは将来の技術的な問題として考えていきたいと思います。

ということでまとめますと、まず日米メディアの計量分析の手法を提案しました。これによると、ニュース報道の国際的な、あるいは時系列的な比較が可能です。これは一番最初にその情報バイアスの問題に非常に関心があるからという話をしましたけれども、これによって情報バイアスというのがある程度見えるようになります。つまり、同じトピックについて、アメリカあるいはほかの国でどうなっているかということを比較することができるようになるからです。

これは問題点なのですけれども、こういう話というのはマスコミ研究で主にされているのですが、この研究の整合性とか指標としてどの程度なのかということをもうちょっと詳しく調べていく必要があります。これは計画中です。

あとは分析対象のグローバル化ということです。今のところ、アメリカと日本しか見ていないわけですけれども、これを中国、韓国、それからアラビア語圏に拡大することによって、世界でどのようなイベント、あるいは事件に対して注目が集まっているかということを比較することができるようになると思われます。これは今、非常に強い関心を持っているところです。

あとは、今回の話というのはウィキペディアというのを使って、その概念を細かく分解することでトピックをつけていくという手法をとりましたけれども、それだけではまだ十分ではありません。例えば、日本の記事を見てみると、殺人事件とか、あるいは暴行などに関する話題が多いのですが、これらはアメリカのメディアから見ると、割とニュースバリューが低く、ウィキペディアにも項目としてはあまり現れません。このため、それらをうまく広く拾えるように概念体系を拡張する必要があります。今、これは検討中でして、１つは自動的にその概念を構築していくということが考えられます。あるいは、既に存在しているいろんなオントロジーと組み合わせて、概念を成長させるということも可能だと思います。例えば、ウィキペディアの概念空間がこのぐらいだとしますと、概念が欠落しているところを、こんなふうに埋めていくことが、この手法の精度を上げるためには必要になってくるかと思います。

以上です。（拍手）

○司会（三輪）

どうもありがとうございました。私がお願いして、皆さんに時間を守っていただきましたので、これからディスカッションの時間をたっぷりとれます。

質疑応答

○司会（三輪）

パネラーの先生に前に出てきていただきたいので、いすの設置をお願いします。

それでは、よろしければ、先生たち、前の座席のほうについていただければと思います。もう自由にお好きなところにどうぞ。今、中牧先生がちょっと席を外していらっしゃるので、戻られるまでちょっとお待ちします。

それでは、せっかく皆さんにいらしていただいているので、中牧先生への質問はまた後ほどということで、まず今こちらにお座りいただいている３人の先生に対して、きょうの御発表についての御質問があれば何なりと御発言いただきたいのですが、質問あるいはコメントのある方はぜひ手を挙げてください。

それでは、皆さんが質問を考えていらっしゃる間に、司会のほうから僭越ながらちょっと質問をさせていただきたいと思います。

まず、日高先生にご質問なのですけれども、お話の中でほかの領域の仲間の方たちと一緒に研究をされているということでしたが、どういう分野の方たちとどんなふうに手分けして研究をしていらっしゃるのか、差し支えないのない範囲でお話しいただければと思います。

○日高

現段階では、それほど学際的な研究というわけではなくて、科学研究費を続けてとって少しずつテーマを変えながらやらせていただいているのですけれども、今３年目を迎えるプロジェクトは、ジャポニズムという19世紀の終わりに日本のものがヨーロッパで愛好されて影響を与えたというようなよく知られた現象があるわけなのですけれども、そのジャポニズム以前の段階での日本文化の受容に焦点をあてています。

ただ得意分野は美術ですので、私が前の科研とかで積み重ねてきた成果のステップアップということで、美術史が中心になるのですけれども。

私自身は交易品の中でも漆器のことをやっているのですが、もう一つ研究が比較的進んでいる分野として、伊万里とか柿右衛門とかの磁器の輸出があります。同じ美術史とはいえ、工芸は技術が大きく異なることもあり、なかなか一緒に議論をし合うということがありませんので、今回の協業の経験は有意義であると感じています。主要な日本からの美術工芸品として漆器、磁器、そして、遺品が少ないのでなかなか難しいのですが、染織品、

着物がやはり輸出されて、何かローブみたいな形で、オランダではヤポンセロッケンと言われて、かなり知識人の階層で流行るのですけれども、その３つ交易品を中心に、ほかにも屏風だとかを扱っています。

関心としては、もっとほかの文化的な影響で、イエズス会演劇だとか幅広いところにも興味を持っているのですけれども、今回は交易品、磁器と漆器と染織というのを軸にして、それらがヨーロッパのシノワズリーの時代に、中国のものとかほかの地域のものとまざって、日本のものがどういうふうに受容されたかということを調べて回っています。

○司会（三輪）

どうもありがとうございます。やはり今のお話の中で、磁器と漆器とでは技術が全然違うから、その間のコミュニケーションとか共同研究がなかなかないというお話だったのは、実感としておっしゃられたことが非常に胸に響きました。ありがとうございます。

では、続けて私のほうから質問させていただきますが、井上先生に置物ということでネコとタヌキのお話を伺っていたのですけれども、現在日本からのお土産品で特にお子さんたちによく受けるのはハローキティの人間なのですね。あれもネコなので、それと招き猫は何か関係があるのかなと思いながら。でも、こんなことを伺ったら失礼かなと思ってもいるのですけれども、先生、もし何かその辺のつながりがあるのかないのか、教えていただけるとうれしいです。

○井上

ハローキティのことを私はちゃんと調べたことがないので、よくはわかりません。招き猫とぱっと見が似ているので、つながっていると言えばつながっているのでしょうが、それに類したことで、あれは何だっけな。ウサギのピョンちゃんを薬局に置いていますよね。あれは、招きウサギとして考えたんだというふうに製薬会社が言っていました。ハローキティについては、形を見ると似ているとしか答えようができないので、申しわけありません。

○司会（三輪）

どうもすみませんでした。私の個人的な感想で。

先生、お願いします。

○中牧先生

ハローキティについて私が聞いた話ですけれども、アメリカでつくられたハローキティの中には、非常にセクシーな言葉遣いでしゃべる（あえぐ？）人形があるそうです。日本

ではかわいいというのがハローキティのイメージですけれども、アメリカではセクシーという側面があるので、井上さんの話と何かつながっていくところもあるやに思っております。

○井上

そういえば、バービーちゃん人形もアメリカのものはすごくボディラインを強調していますが、日本に来るとややぺったんこになりますし、ジェニーちゃんとかタミーちゃんとか日本のものはやっぱり幼児体型にするようにしていますよね。我々はチンチンとか金玉には積極的だったのだけれども、そちらのほうに関しては何かやや消極的なのかもしれませんね。

○中牧

井上さんの話で、下からのポップカルチャーというのがあって、これは非常におもしろいと思いました。日本の移住者が持っていったものの中に、螺鈿の漆器などという高級なものは全くありませんで、柳行李の中に荷物をつめていったのですが、その中に置物としてはえびすとか大黒はありましたね。

ネコやタヌキの話で思い出したのは、おサルさんです。三猿のコレクションが民博にありまして、私が担当して展示までしたこともあるのですが、これは移住者というよりはむしろ商人とか外国人の観光客なんかが多分広めたのではないかと思います。ルーツは日光東照宮の三猿と言われていますが、中国、東南アジア、インドなどにさかのぼるもっと古いルーツがあります。ただ近代の三猿というのは、「見ざる・言わざる・聞かざる」というコンセプトで世界じゅうに広まったようですが、そのきっかけのひとつが日光東照宮だと思います。

三猿は、子供たちの教育とか処世訓というような意味合いで広がっていった日本発のポップカルチャー、あるいはフォークカルチャーのひとつだと思いますけれども、それを先ほどの井上さんの話にひっかけると金山神社に三猿ならぬ五猿というのがあります。金山神社は川崎大師の近くにありますが、真言宗の寺院である川崎大師とは違う神社なのです。そこでは絵馬を申年（1992）につくりまして、それが５つの猿なんですね。「見ざる・言わざる・聞かざる」、それから両手で前を隠す「せざる」、そして両手で後ろを隠す「させざる」という御縁（五猿）にひっかけたサルです。

○井上

後ろを隠すのが「させざる」なんですか。後背位を念頭に置いているんですか。

○中牧

それはエイズの関係ですね。

○井上

現代的なんですね。

○中牧

現代的な予防策ですね。

○司会（三輪）

カルチャーのとても深いところまで、真相を追求したやりとりをいただきました。どうもありがとうございました。

野本先生に２つ質問させていただきたいのですが、１つは日本の新聞でいろんな新聞が対象になっていて、ほかの全国紙ぽかったのですけれども、なぜ河北新報が入っていたのかなというのが１点。

それからもう一つは、私の個人的なデータマイニングとかその辺のところにちょっと関係してしまうかもしれないのですけれども、ウィキペディアの記事というのがちゃんとした記事とそうじゃないのと結構落差があると思うのですけれども、その辺は全然気にしなくても大丈夫なのかということについて、ご経験談をお話しいただければと思います。

○野本

まず１つ目の質問ですけれども、一応今回はまずある程度読者層を持っている新聞という基準で選んでいるので、別に地方紙だからと言って、読者層がある程度いるのであれば、それも分析対象にしているということです。だから、基本的に全国紙プラスブロック紙、それからメジャーな地方紙というところですね。

２番目の質問については、これはウィキペディアの記事が、あるいは説明が正しいかどうかというのは、トッピックを判断する上で余り意味がないというか、余り影響がないので、特にそれは余り真剣に考える必要はないのではないかと思います。

○司会（三輪）

ありがとうございました。ぜひ参考にさせていただきたいと思います。

私からの質問は以上なのですけれども、フロアの方でぜひこの機会に質問したいという方がいらしたらお願いします。

○参加者（齋藤）

日本歴史の齋藤と申します。

野本先生にちょっとお伺いしたいのですけれども、電子資料館のほうにかかわっていらっしゃるということで、きょうお話になったような技術をもし国文学に応用するとしたら、どういったようなことが考えられるでしょうか。実現可能かどうかということは別にしても構いませんので、何か例みたいなものがあれば教えていただければと思います。

○野本

１つのアプローチの仕方としては、まず書誌データを用いまして、その中でそれにある程度分類体系を付与するということは可能になると思います。例えば、使える情報としては、書誌データにするのであれば、そのタイトルなり著者なりを使いまして、その中から今どういう分野が成長しているのか、あるいはどういう分野が小さくなっているかということを判断する上では、この技術を使うことができるかなと思います。

あとは、基本的にこれは別に新聞記事だけに使える技術ではないので、例えば一般的にテキストをどう解釈するかというその意味をつかむときに、一般的な概念体系ですることで、その意味構造を考えるというのは十分可能なので、すぐ何か新しいものがこれによって実現されるかというと、ちょっとなかなか難しいと思うのですけれども、それをこれを使って新しい技術につなげていくことは可能になるかと思います。

○参加者（齋藤）

そうすると、内容に関する研究にも応用できるかもしれないと。

○野本

ええ。あと、基本的に文体論とかそういう話にもつながっていくのではないかと思います。

○参加者（齋藤）

ありがとうございました。

○司会（三輪）

こちらで手が挙がっているのでお願いします。

○参加者（中尾）

メディア社会文化専攻の中尾です。

野本先生に引き続き質問なのですけれども、よく日本の国内の新聞でも新聞社さんによって肩入れする分野が違うと思うのですけれども。あと、小学校なんかでも、よく２社の新聞で同じ高校野球の記事でも、地方によって応援している高校がやっぱり違うよねというのを扱ったりもするのですが、そういう国内の新聞の比較みたいなものは既にほかの研

究でそういうことをやっている分野があるのかということと、先生の技術でそういうことをやろうと思っているかどうかみたいなことをお聞きしたいと思っています。

○野本

この話というのは、今までは大体マスメディア研究で主にやられていまして、そこでは基本的に新聞を幾つかピックアップ、例えば毎日とか朝日、読売などを読み比べて、それでどう中身が違うのかということを研究していました。したがって、この新聞とこの新聞の比較というのは、マスコミ研究の中ではそれほどされていないような気がします。

この技術を使えるかということに関しては答えは「イエス」で、それは十分可能でして、さらにそれから深い解析へもつなげていくことができまして、例えばいわゆる肯定的記事を書いているのか、否定的に記事を書いているのかとか、ある程度判断に対して新聞社がどういう判断をしているかということを分析するときにも使えるかと思います。だから、これは地方紙、全国紙を分析対象にして、それがどう違うかを見ることによって、トピックがどういうふうに違っているかということを分析するのは、比較的簡単だと思います。

○参加者（中尾）

ありがとうございました。

○司会（三輪）

ほかにどなたか。はい、後ろのほう。先生。

○参加者（戸部）

国際日本研究の戸部です。サクラの質問になって恐縮なのですが、井上先生に質問させていただきたいと思うのですけど。

ネコは国際化して、タヌキは日本にとどまったというお話と解釈いたしますと、それはなぜなんだろうというふうにちょっとひねった考え方をしますと、ネコは西洋でも身近な動物で、タヌキはそうではないのかというふうに考えたほうがいいのか、それとも何かやっぱり文化的な理由があるとすると、私は逆に考えて、なぜネコなら西洋のほうに受け入れられるのだろうというふうに、猫をかぶったということだけなのかどうなのか、その辺のところをご説明いただければありがたいなと思います。

○井上

私は前にぶら下がっているものだけをきょうは強調し過ぎたかもしれません。

ただ、これは私はやはり侮れないと思っています。実を言うと、だるまは結構ヨーロッパに出ています。福助はそうは多くないけれども見かけます。そういう中でタヌキが最も

出にくいのはなぜかと考えた場合に、やはり前にぶら下がっているものだろうと思ってしまうわけです。

ついでに言うと、招き猫のネコの図像自体はリアルなネコではありません。タヌキの映像自体も、あれは本物のタヌキとは似ても似つかない格好をしています。だから、タヌキがアメリカやヨーロッパに生息しないこと自体が、文化伝播の妨げになっているかどうかはわからないと思います。「平成狸合戦ぽんぽこ」自体は、恐らくイスラム圏以外ではどこでもおもしろがって見られているのではないかと思います。

ただ、おっしゃるように、私はきょうは話を生殖器崇拝の方向でまとめてしまいましたので、そこからこぼれ落ちる部分については、あえて目をつぶってしまっているというところはあるでしょうね。そこは反省する気はないんやけど、まあ反省します。

○司会（三輪）

はい、どうもありがとうございます。ほかに。

大髙先生。

○参加者（大髙）

日本文学の大髙です。同じく井上先生にご質問なのですけれども、今の戸部先生のご質問に対して、生殖器崇拝といいますか、土俗信仰のあらわれという意味のことをおっしゃったように思うのですけれども、私はきょうのお話を、ああ、これは神道の話だなと思って伺っておりました。日本の神道は生殖器崇拝をいたしておりますよね。それらが近世あるいは明治になって淫祠の破却という形で目の前から消えていたのが、きょうおっしゃるようなネコとかタヌキのような形になって復活をしてきているというか、とどまってきているのかなというふうに思っております。

ただ、きょうお話に出ました男根を崇拝している、男根を御神体にしている神社のお祭りにヨーロッパの若い方が大変興味を持って参加しているというのは、それはどういうふうに解釈したらいいのかなということもちょっと疑問に思いましたですけれども、そういうことにつきましてお考えをお聞かせいただければと思います。

○井上

いわゆる秘宝館のたぐいを営んでいらっしゃる方に神社の神主さんが結構いらっしゃるので、神社と生殖器崇拝の間につながりはあるんだと思います。今でも祠の中に陽物、隠物を御神体として置いているところはあると思います。

ただ、神社という問題には還元しにくいでしょうね。やはり金玉という問題があります

から。どうしてこんなものをマスコットとし、アイドルとしたのだろうというのは、神道観ではわからない。神社神道が重んじたのは、やっぱり陽物なんじゃないかと思いますね。金玉に対しては、余りうやまわないように思いますね。技術史的には、ふいごである程度説明できるのだと思いますが、私はそこに私たちの言葉、「そんな金玉の小さいことでどうするんだ」とか「あいつには金玉まで握られている」とか、精子の精という字を精神主義の精神にも使う、そこで心と金玉がつながるのかどうかはわかりませんが、もうちょっとほかの要素も考えてみたいと思っています。

ついで言うにと、陽物崇拝自体は世界じゅうにあると思います。世界じゅうに陰茎の名残をとどめたものを偶像化しているものはあると思います。イスラム圏は少ないかもしれませんが。

ただ、金玉を偶像化しているというのは余り類例を見ないように思うので、私はここに日本文化固有の何か根っこの１つがあるのではないかと考えます。

どうしてヨーロッパ人、アメリカ人が川崎大師のチンチン祭りに集まっているのかは、それは彼らにとっておもしろいからだろうと言うしかありませんし、英語の観光ガイドがよく大きく取り上げているので。だけど、幕末、明治初期のことを思えば、彼らが嫌がったから明治新政府はより一層撲滅運動を進めたのに、今その彼からの子孫が喜んでいるという現象に、私は世界史の皮肉を感じるという感想を持つ以外にありません。

○参加者（大髙）

どうもありがとうございました。

ご論旨に関係のない細かなことで一、二申し上げますと、ぽんぽこは宮崎駿でなくて、高畑勲の作品ですね。

それから、俵２つの上に乗っかっているのは、だるまもあるのかもしれませんけれども、大黒さんじゃないでしょうか。それが定形かなというふうに思いましたので。

○井上

すみません。宮崎アニメと言うべきでしたね。高畑勲さんでした。

大黒さんだと私も思いますが、その大黒さんを支える米俵２の上にだるまが乗っかった段階で、密かな生殖器崇拝のからくりが働き出しているように私の目には見えました。それは私の目がよこしまなのかもしれません。

○参加者（大髙）

もちろん、そのご論旨に全く大きくかかわるようなことではありませんし、お教えいた

だきましてありがとうございました。

○司会（三輪）

もう一方ぐらい質問があれば受けますけれども。

はい、山田先生。

○参加者（山田）

招き猫の話をもうちょっとやってもいいでしょうか。映像を見せたいのですけれども、よろしいですか。私、ちなみにこの分野の研究者でも何でも全然ないのですけど。

先週アメリカに行ったときに、飛行機の中で招き猫をが売られているのを――全日空なのですけど――見つまして、ちょっとお見せしますと、全日空で今、こんな招き猫が飛行機の中で――４万円ほどするのですけど――売られてます。黒いやつと透明なやつがここにいますけれども、これも一種の海外に持っていかれてという話だと思います。

それでもう一つは今の招き猫なのですけれども、三条大橋のたもとに檀王法林寺というところがありまして、ここが招き猫の最古だと主張されているのですね。それで、ここには主夜神信仰というのがあって、昔船乗りが船に乗ったときに、ネコというのはネズミを退治してくれるというようなことで、非常に珍重されていたということです。ここにおさめられている最古の招き猫というのは江戸後期と書いてあるのですけれども、真っ黒いネコなのです。

ですから、多分こういうもののオリジンというものと、それからきょう井上先生がおっしゃったような普及のプロセスというのは若干違うのかもしれません。

ちなみに、ここの法林寺の始祖というのが、400年ほど前なのですけれども、中国に向かう途中に沖縄に流れ着いて、そういった意味で海洋貿易と非常に深く関与していて、念仏踊りが沖縄エイサーになったというそのもとのような人なのですね。ですから、その辺のところとも何かちょっと関係があるような気がして、非常に興味深く話を伺わせていただきました。

○井上

あの形をした人形自体は幕末期のものだと思いますが、ネコが幸いをもたらすという考え方自体は随分古くからあります。ネコが人を招くという考え方自体も随分あります。そして、ごく初期にできた幕末の招き猫は、ひょっとしたら私が気づいていないだけでほかのところで使われた可能性もないとは言えません。

ただ、20世紀の初めごろの文学作品などで見ていると、招き猫に対して水商売のまじな

いものという感想を示すようなものをよく見かけます。

あと、明治・大正期、昭和の戦前ぐらいまでかな。花柳界の案内物、芸者さんのことを書いたような書物に招き猫を表紙にしたものをよく見かけます。

ですから、ある段階までは、歴史的事実としてのルーツがどこにあるかはいろいろ可能性があると思いますが、多分1930年代ごろまでは招き猫は遊廓、花柳界、芸能界、水商売あたりのまじないものとして、我が民族の間で認識されていたということ自体は、僕は確かだと思っていますので。

でも、今おっしゃっていただいたようなところは、本とか論文にする際はやっぱり見過ごせないところですので、それはちゃんと調べたいと思います。ありがとうございました。

○司会（三輪）

せっかく盛り上がったところで水を差すようで恐縮なのですが、時間が過ぎてしまいましたので、最後のまとめということでパネラーの先生、お一方、一、二分で何か最後のまとめをしていただきたいのですけれども、マイクがありますので、まず中牧先生からお願いします。

○中牧

まとめというか、私は移住ということを通して、非常に多角的なパースペクティブから見ることが必要であるし、総研大というのはそれにふさわしいところだというふうに思ってますので、そんなことから午後のディスカッションにもつながればいいかなというぐらいで。

○司会（三輪）

ありがとうございます。

○日高

何かまとめになるようなことはお話しできないのですけれども。私は学生のころから専門はと聞かれると、「日本美術史」というふうに答えてきて日本美術史が専門のつもりでいたのです。

けれども、ここ15年ぐらいたまたま海外に行ってしまったもののをことを対象としていくうちに、それをつくったのは日本の職人なんですけれども、それを注文したオランダ人とかが、かなりでき上がるものについて関与して一緒につくり上げているということがわかってくる。そうすると、もはやそれは日本美術ではない、日本美術というふうに言えないんじゃないかと思ってきまして、では、日本美術とか何々美術とか専門を分けなきゃい

ないんだろうかと。

もちろんある程度は限定しないと幾らでも広がっていきますので、便宜上、そういう地域で区切るというのはあり得るのでしょうけれども、最近の歴史学の流れとして、何か自明な日本文化とかというものがあって、そこに外からの影響が加わって、というような考え方ではなくて、日本的なものというのは常に動いていて、私が専門にしている蒔絵というのは、何かすごくそういう日本的なるものの代表みたいな役割をずっと背負わされてきたけれども、でもそこにはまた日本的なものじゃないものも押しつけられたきたような歴史がある。そういうことで世界と日本とのいろいろなつながりを通して、世界史の中の日本美術史ということを考えております。

何かご自分の専門のご研究にちょっとでもかかわるところがあればいいなと思ってお話をしました。

○司会（三輪）

ありがとうございました。では、野本先生。

○野本

今回は技術的な話になってしまったのですけれども、基本的には今まで情報バイアスということが器的に語られることが非常に多かったのですが、それをきちっと数字でどう違うかということを見せるにはどうしたらいいかということを考えてみました。今後はちょっと規模を大きくしたり、社会学者等、あるいはほかの人文系の研究者とコラボレーションをしまして、ちょっと深みをつけていきたいかなと思っております。

○司会（三輪）

ありがとうございました。井上先生、最後に一言。

○井上

私も国際日本研究専攻で大学院生の指導に当たらせていただいたことは何度かありました。彼らと接していて、「ああ、君の研究、ここがおもしろい。ここを膨らませたらいいよ」とアドバイスをしたこともあります。「井上先生の言うとおりにそこを膨らませて学会で発表したら、興味本位だと言って批判されました」という返事も何回も聞きました。そう、私は大学院の教育には携わらないほうがいいのだと、もうこのごろは本当に思っています。

ですが、一寸の虫にも五分の魂で口幅ったいことを言います。興味が本位ではない研究に何の意味があるんだと私は思いたい。興味本位というレッテルを学会から張られること

をおそれて引っ込み思案になるような学問に、学問の値打ちがあるのかと。

随分口幅ったいことを申し上げました。失礼いたします。

○司会（三輪）

パネルの先生たちのご発表を午後のワークショップに学生の皆さん、ぜひつなげていただきたいと思います。

皆さん、とても興味深い話をどうもありがとうございました。最後にパネルに協力いただいた先生に皆さんから盛大な拍手をお願いします。（拍手）

〔午後　０時４０分　終了〕